

二〇二二年度

併願優遇入試Ⅰ・一般入試Ⅰ 入学試験問題

国語（五十分）（全十五ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

一 次各文の太線の漢字の読みがなを書け。

- (1) 寸暇を惜しむ。
- (2) 迷惑を被る。
- (3) 荷物が道を阻む。
- (4) ほころびを繕う。
- (5) 飽食の時代。

二 次各文の太線のカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 救助隊をハケンする。
- (2) 表現上のトクチョウ。
- (3) マギらわしい表現。
- (4) キカク書を提出する。
- (5) ショジョに数が減る。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

高名なバイオリニストの娘である「私」(御木元玲<sup>みきもとれい</sup>)は、声楽を専攻し、音大の付属高校へ進学をめざしていた。しかし、第一志望校には進学できず、私は音楽とは関係のない、新設の明泉女子高校へ入学した。二年生になり、合唱コンクールの季節がやって来た。私はひょんなことから指揮者を引き受け、そのうえ、音大付属校の入試で出た歌を、クラスの合唱曲に選ぶこととなってしまった。

だが、私たちのクラスの練習は思った通りには全く進まなかった。

「ここは何度も注意してるところだよ、勢いをつけてわっと声を出さないよ」(中略)

「あのさあ、御木元さん、(中略)あたしたちべつに優勝しようとか思っ  
つてないし」(中略)

<sup>なかみぞ</sup>中溝さんが私のほうを見ずに続けた。

「こんな練習、楽しくないよ」(中略)

「じゃあどんな練習をしたいの。どんな練習なら楽しいと思うの」  
「どんな練習っていわれても困るけど……音楽って楽しいものなんでしょ、勝ち負けは関係ないんじゃないの」

音楽って楽しい。勝ち負けじゃない。——たしか何度目かの練習のときの私の言葉だ。思った通りに声が合ったときの気持ちのよさを話した。個々の思惑など軽々と超えて広がっていくのが音楽というものだ、何

かそんなことを練習の合間に話した。気が緩んだのだろうか。恥ずかしげもなくそんなことを話した私も私だけれど、それを逆手に取って得意げに突きつける中溝さんもひどい。彼女は休んでばかりで、たしかそのときも来ていなかったはずだ。誰か参加していた友達に又聞きでもしたのだ。

いい返そうとする気持ちが膨らみかけて、すぐに萎んだ。私の言葉がどんなふうにも伝えられたのだろう。それを考えると、そのときだけでも気を許したことが悔やまれた。ここでいい返してもしかたがない。(中略)

やめようか、と思った。指揮など初めからやりたくなかった。合唱コンクールにも興味はない。自分には関係がないと思っていたくらいだ。

それなのに、①やるからには、などといつのまにか思ってしまった。いらしい。そういう執着とは縁を切ったつもりだった。自分で自分の気持ちがあつかめない。私を見捨てた声楽を見返してやろうという気持ちが混じっていたのだろうか。こんなことで見返せるとは思っていないし、見返せるはずもない。もしも私が素晴らしい合唱をつくり上げることができたとしたって、それと声楽とは何の関係もない。じゃあ、どうして。どうして意気込んでしまったのだろうか。興味も熱意もないふりを続けながら、その実、なんとか上手に仕上げてみせようと考えていたなんて。それでどうしようというのか、何のためにがんばっているのか。——好きだから。歌が、合唱が、好きだから。浮かんでこようと答を無理

やり閉じ込めて蓋をする。好きだけじゃ駄目なのだ。才能がなければ結局はみじめな思いをすることになる。

そのとき、小さな声が出た。

「もうちょっと、みんな、気持ちを合わせようよ」

ピアノの前に原さんが立ち上がっていた。

「こ、声を合わせるっていうのは、こつ、こつ、こつ、こつ、こつを合わせるっていうことだから——」

こつ、こつ、こつ、こつ、こつ。そんなに緊張しなければ同級生たちのころも少しは動かせたかもしれない。教室はしんとして、それからくすくすと笑い声の起る、原さんは顔を真っ赤にしてうつつむいてしまった。

やめてもよかった。みんな汚れたシャツだと思った。だからわからないのだ。ほんとうは合唱が楽しいことも、私の言葉も、きっと永遠に通じないだろう。指揮を降りてしまえば楽になれる。でも、降りなかった。あの歌を歌う以上、最後まで見届ける責任がある。

まとまらないまま合唱コンクールに出た。歌は一本調子だし、緊張したのかピアノはいつも以上にミスばかりだし、こんなに恥ずかしい舞台には二度と立ちたくないと思ったほどだ。

拍手はまばらで、もちろん賞には入らず、舞台を降りて体育館の客席に戻った私たちには満足感のかけらもなかった。クラスの一体感など生まれようもない。それでも、ともかく終わった。これで、あの歌とはお

別れだ。受験と合唱コンクール、ふたつも綾のついたあの歌を、もう歌うこともないだろう。体育館に並べられた椅子いすにすわり、②私は今日のこと**もぼんやりの膜にくるんで忘れてしまおう**と思った。それであとはまたぼんやりとした日々に戻れるだろう。

私の望みどおり、ぼんやりはすぐにこの手に戻ってきた。合唱コンクールとその前後の、苛立いらだちも恥もいざこざも、すべてなかったことのように穏やかな日々。そのうちにまた次の行事がやってくるのだ。——マラソン大会だ。次は、初冬のマラソン大会だった。

合唱コンクールに負けず劣らずマラソン大会も人気がない。あたりまえだと思う。ただ走るだけで苦しいばかり、しかもまったくの個人競技だ。どうしてこんなものが学校行事として存在しているのか理解ができない。そんなふうに感じるのは私の運動神経が並外れて悪いからで、もしかしたらマラソン大会を楽しみにしている人も中にはいるのだろうか。

その日が近づくにつれ憂鬱ゆううつになる。正門を出発して住宅地を抜け、大きな橋のもとに出たら川べりの道に戻ってくる。七キロ弱のコースになる。運動部でよほど鍛えてでもない限り、走り通せるわけがない。しかも、やっと学校に戻ってきててもそこが終点ではない。ゴールを盛り上げるためか、グラウンドをさらに一周することになっている。あの一周が特につらい。ほとんどの生徒がゴールしてしまい、あちこちにすわって談笑している前を、ひとりで最後まで走る。体力的にも精神的にも

きつい一周だ。

③サボろうか、どうしようか、迷いながらも結局は登校した。たしか去年もこうだった。休もうと思っていたのに、朝、母の顔を見て気が変わった。家において母と一日じゅう顔をつきあわせているよりは、マラソン大会のほうがましだと思ったのだ。いつもの行事と同じようにぼんやりとやり過ぎればいいだけだ。——とはいえ、走るのはやっぱりつらかった。今年もサボらなかつたことを後悔するのだろう。空を見上げ、ため息をつく、思いがけず息が白い。寒い朝だった。

スタートした時点ですでに足が重かった。ガンバロウ、と肩を叩いてくれた佐々木さんがはるか前方へ飛び出していく。(中略)校門を出たあたりで私はもう最後尾のグループにいた。早くも息が上がっている。脇腹が痛い。どう足掻あがいてもこのままビリを走ることになるだろう。すぐに私は走るのをあきらめて、脇腹をさすりながら早足で歩く。あつというまに周りに誰もいなくなつた。ときどき前方にジャージを見たけれど、すぐにまた見えなくなつてしまう。住宅地を抜け、橋の傍らで折れて川沿いを走る。歩く。走る。歩くほうが多い。息が苦しい。

何をやっているんだろうと思う。今ごろは歌を歌っているはずじゃなかったか。こんなところを息を切らして歩いたり走ったりする代わりに、音楽と取っ組みあっていたかった。肩で息をして歩く。もはや早足とさえいえない。のろのろと足を進めながら、見上げた土手にススキが風に吹かれていた。ススキに呼ばれるように、ふらふらと川のほうへ道を外

れる。荒い息を整えながら、低い土手を上る。向こうは灰色の大きな川だ。その流れを眺めるうちに、④不意に自分が今どこにいるのかわからなくなってしまう。今の私は音楽からずいぶん遠い場所に立っている。そのことだけは、手で触れることができるくらいはつきりとわかった。

土手の上に佇たたりんでいると、遠くから威勢のいい自転車が来るのが見えた。見えたと思うまにぐんぐんこちらへ近づいてくる。乗っているのは小ぶりの入道のような男だ。危険を感じて土手の端に寄ったのに、私をめがけて突き進んでくる。立ちすくむ私の真前で、自転車は急ブレーキをかけた。驚いていると、走れえ、と自転車の入道が怒鳴った。どこかで見たとような顔だと思ったら、明泉の先生だったらしい。慌てて走り出す私のすぐ後ろを、走れ、走れ、と自転車で追いかけてくる。もう走れないんだよう、と口の中だけでいって、半分泣きそうになりながら土手から歩道へ下りて走る。足が痛い。脇腹も痛い。学校まではまだ遠い。息が上がリ、心臓が飛び出しそう。先生はどこまでもついてくる。どうやらほんとうに私が最後の生徒だったらしい。

校門をくぐると、すでに備品の後片づけをしている生徒や先生が目に入る。私のすぐ横を伴走していた自転車がそこでようやく止まる。

「ファイトファイト！ もう一息だ！」

かろうじてうなずいてみせる。足がもう前に出ない。まだこれからグラウンドを一周しなければならぬなんてつらすぎる。自転車置き場の横を過ぎ、体育館の裏手を通り、やっとグラウンドが見えてくる。ジャ

ージの生徒たちが散らばっている。その明るい場所へ、私は一向に近づいていかないような気がする。走っているのか歩いているのか自分でもわからない。足は上がっているのか、地を這はっているだけなのか。それより、この心臓はだいじょうぶなのか。耳か、頭か、もしかすると目の奥が、ガン、ガン、ガン、と規則正しく鳴っている。このガンはラ。ドレミアソラ、の、ラだ。そんなことがわかったってなんにもならない。絶対音感なんてどこかへ行ってしまう。

汗だくになって走りながら、私の目はトラックの茶色しか見ていない。私の耳は、ガン、ガン、ガン、——と、それからかすかな旋律をとらえる。どこからか、歌が聞こえる、ような気がする。最初はひとつの声。か細い、頼りない旋律だったのが、次第に声が集まって大きく力強くなっていく。幻聴？ ではない。荒い息と心臓の鼓動と耳鳴りと、それらを超えて歌が聞こえる。何の歌だかわからなかった。ただ、どこかで聞いたことのある歌だと思った。顔を上げて、あたりを見る。足がふらつき、視界が揺れる。その隅に、ジャージの一团がかたまっているのが見える。ふたり、三人、集まってくる。まんなかには短パンの小柄な生徒だ。

はっとした。まさか、と思う。これはもしかして、あの歌、だろうか。

あの、私たちが合唱コンクールで歌った歌。最後までうまく歌えなくて、それどころかクラスが全然まとまらず、わずかな自信までなくしていた。

⑤あのときの歌とは、まるで別の歌に聞こえる。でも、たしかにあの歌

だ。こんな歌だったのか。こんなに素朴で、いきいきと生きるよろこびを歌った歌だったとは。若草が薫り、雲雀が舞う空の下で、若い田舎娘たちが裸足で戯れながら歌を歌っている。トラックを走りながら、目の前にその光景が浮かぶようだ。

私はまったく考え違いをしていた。歌わせよう、歌わせようとしていた。技巧を重視して、歌う動機も気持ちも置き去りにした。薄暗い教室で、譜面から目を離さず、注意ばかり飛ばして歌わせる歌では決してなかった。聴かせよう、感動させようと歌う歌でもない。これは、まぎれもなく彼女たちの歌、そして私たちの歌だ。

足が震えそうだ。胸が高鳴っている。マラソンのせいばかりではない。曇る目に、原さんが映っている。牧野さんも柴崎さんも、中溝さんもいる。歌のはじまりに私たちは立ち会っている。ここにいるみんなが、何もなかったこの場所に歌のはじまることを確かに見た。

もともと、歌のはじまりはこういうものだったのかもしれない。よろこびや、祈りや、誰かに届けたい思いを調べに乗せる。同級生たちが私に向かって——おそらくは学校一、足の遅い私を励ますために——いつのまにか声を合わせたように。その自然な感情の高まりこそが歌だったんじゃないか。足を引きずり涙を拭いながら私は走っている。歌声が大きくなる。あと少しで、ゴールだ。

(宮下奈都『よろこびの歌』より。なお、本文には省略等がある。)

\*1 みんな汚れたシャツだと思った……みんな自分の希望通りには進学できずに明泉女子高校へ入学してきたのだという思いを、「私」が「汚れたシャツ」にたとえている表現。

\*2 綾のついた……因縁をつけられた

問一 傍線①「やるからには、などといつのまにか思ってしまったらしい」とあるが、その理由に最も近いものは、次のうちではどれか。

ア 受験に失敗しても音楽は楽しいものなので、これからも趣味として付き合っていけそうだと安心したから。

イ 才能がなければ駄目だとわかっているのに、素晴らしい合唱を作り上げることに未練があったから。

ウ 楽しくない合唱の練習よりも、みんなの意見を取り入れた楽しい練習のほうが重要だと気づいたから。

エ 興味も熱意もないふりをしながらも、本当は大好きな合唱の練習に専念したいと意気込んでいたから。

問二 傍線②「私は今日のことばんやりの膜にくるんで忘れてしまおうと思った」とあるが、この表現から読み取れるものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 合唱コンクールの嫌な思い出を振り払いこれからの心地よい

日々を想像するだけで、次にくる嫌なマラソン大会のことなどすっかり忘れてしまえると錯覚している。

イ クラスにまとまりのないまま合唱コンクールに出場し一体感も満足感も経験できなかったが、指揮者でしかなかった自分には責められる理由など何もないと居直っている。

ウ 受験でも合唱コンクールでもいい思いを経験できなかったあの歌とはようやく手を切ることができそうで、これからは好きなことだけに没頭できる日々を楽しみたいとうきうきしている。

エ 合唱コンクールで経験したいざこざなど人間関係の煩わしさには二度と巻き込まれることもなく、周囲とは無関係に淡々と過ぎてゆく穏やかな日々が来ることを待ち望んでいる。

問三 傍線③「サボろうか、どうしようか、迷いながらも結局は登校した」とあるが、「私」が「サボろう」としたのに「結局は登校した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 運動神経が並はずれて悪い「私」なのに、それでも一日中母親と顔をつきあわせている気づまりよりも、いつものようにやり過ぎす学校行事に出ることの方が楽だと考えたから。

イ スタートする前からすでに足が重く完走は難しいかなと感じていた「私」なのに、マラソン大会を楽しみにしている人のことを考えて、行事を台無しにははいけないと考えたから。

ウ いつもは苦しいだけのマラソン大会なのに、合唱コンクールを乗り越えられた「私」だからこそ、今年は必ずゴールできるに違いないと考えたから。

エ いつものようにぼんやりとしていた「私」なのに、母と顔をつきあわせたために自分の嫌いな部分に気がつき、一人で最後まで走り切ることの方が気持ちがすっきりすると考えたから。

問四 傍線④「不意に自分が今どこにいるのかわからなくなってしまふ」とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア マラソン大会で歩くほうが多い「私」なので、自転車に乗って追いかけて回す先生の姿を眺めて、あれに乗れば苦しくないのにとوراやましく思う気持ちを表現している。

イ 最後尾を走るマラソン大会でのみじめな姿も、声楽と取っ組みあっている音大付属校に進学した自分の姿も、両方とも本当の姿ではないと悲しむ思いを表現している。

ウ 第一志望の音大付属校に進めなかった自分にやりきれない思いを抱きながらも、それでもこの学校で過ごさしかないと、あきらめて嘆き悲しむ気持ちを表現している。

エ 音大付属校へ行って思う存分声楽を楽しんでいるはずの自分の姿と、一番苦手なマラソン大会で苦しんでいる現実の自分の姿との

落差を、痛切な思いとともに表現している。

〔四〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

問五 傍線⑤「あのとときの歌とは、まるで別の歌に聞こえる。でも、た

しかにあの歌だ」とあるが、今の「私」は「あの歌」をどのような歌としてとらえているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア あのとときの「私」は技巧を重視し歌う動機や気持ちを置き去りにしていたが、今は誰かに届けたいという思いを調べに乗せ、自然な感情の高まりから生まれた、私たちの歌だと考えている。

イ あのとときの「私」は聴衆に感動させよう聴かせようと骨折っていたが、今は誰かに聴かせるのではなく、歌い手自身が素朴に生きる喜びを歌うための、私たちの歌だと考えている。

ウ あのとときの「私」でも聴きとれるよう大勢で歌うことに専念し、間違いなく彼女たちの歌声だと「私」に気づかせ、友だちを励ますことだけを願った、私たちの歌だと考えている。

エ あのとときの「私」には手の届かなかった難度の高い歌でさえ、声を合わせて歌うことで驚くほどの表現力が生まれ、今は自信をもって聴衆に届けられる、私たちの歌だと考えている。

私たちが現実に向きあうときの理想的な状態は、つねに悲観的でも楽観的でもなく淡々と現実だけを見つめて対処していく、バイアスのかかっていないニュートラルな状態です。しかし個人個人で、どちらかといえば楽観的な気質、悲観的な気質というのはやはりある。ではどうするのがよいでしょうか。(第一段落)

たとえば京セラの創業者である稲盛和夫さんがこういうことをおっしゃっていました。何か事を進めていくときに、最初は楽観的な気質の人と一緒に仕事をする。そうするとどんどんアイデアがわいて、やろうやろうという気分になる。そしていざそれを実行しようという段になると、悲観的な気質の人とチームを組む。そうすると事において慎重になるというのです。これはひじょうに面白い考え方だと思うのですね。最初からあまりにも現実的に、無理だと言っただけだと発想が小さくなってしまったり、だからといってずっと楽観的なままでも実現しない。両方ないとダメだというのです。(第二段落)

①これは一人の人間のなかでも言えることです。楽観主義的な自分と悲観主義的な自分を両方持って、そのバランスを考えていく。自分の気質と相談しながら、自分に欠けがちな方をフォローしていくとうまくいくことが多いのです。(第三段落)

じつは私たちはすでに小学校から学校教育のなかでそのことを教え



られています。テストのときは、最後の五分で必ず見直しや検算をするようにと教わらなかったでしょうか。まずは「これは簡単だ」と楽観的にどんどん解いてみる。しかし最後までいったら「やはり間違いがあるかもしれない」と悲観的な自分になって見なおしをする。(第四段落)

楽観的と悲観的というのは、大胆であることと慎重であることと言ってもいい。「悪魔のように細心に！ 天使のように大胆に！」という映画監督の黒澤明さんが好きだった言葉がありますが、大胆さと、繊細な慎重さの両方を持って、時によって使い分けていく。これを気質とは少し離れて、考え方のコツとして身につけていくということですね。(第五段落)

(中略)

多くのことは、この「二つのものを切り替える」ということで成り立っています。二つの役割の切り替えというのは、わかりやすく言えば、漫才のボケとツツコミですね。普通とは違った面白いことを言う「ボケ」の人が目立つことが多いのですが、これは「そんなことあれへんがな」と常識的な目線から引き締める「ツツコミ」があつてこそそのものです。

②両方がないと面白くない。(第六段落)

あるテレビ番組で、漫才をするなかで、ボケ役の人には秘密で、ツツコミ役の人がまったくツツコミをしないでいたらどうなるかという実験をしていたことがあります。するとツツコミが入らないのでボケ役の人は漫才が終わることができず、続けているうちにだんだん疲れてきて、

うまくいかなくなってしまう。やはり両方が必要なのです。(第七段落)

(中略)

このボケとツツコミの連動というのは、何か一つの事を進めていくときに応用可能な手法なのです。ボケというのはごく簡略化して言えば、常識的なものの考え方から離れてふざけたことを言うことです。かつて一世を風靡したツイートのネタで言えば、ビートたけしさんが「赤信号 みんなで渡れば こわくない」と言った。こうしたボケに対してビートきよしさんが「よしなさい」とツツコミを入れる、これで漫才が成立します。いわばアクセルとブレーキみたいなものですね。どちらかがちよつと行きすぎたものの言い方してみる。そしてもう片方のブレーキ役であるツツコミの人が、「それは言いすぎですよ」と行きすぎを止める。(第八段落)

〈考え方の教室〉で有効なのは、これを一人でできるようにすることです。「自分はいつも平凡な考え方しかできないなあ」という人も、まずはボケ役になったつもりで極端なことを考えてみるようにすると、そこから抜けだしやすくなる。いわば自分でボケとツツコミの両方をやる、「ノリツツコミ」を身につけると言えばいいでしょうか。(第九段落)

なぜこの二役が必要なのかというと、凝り固まった常識をほぐすことができるからなのです。普段なら絶対に言わないような過激ことでもあえて「いまはボケだから」と大胆に言ってみる。大胆に言いすぎても後でツツコミ役の自分が止めてくれますから、安心してハジけることが

できるのです。そうすると、しだいに発想も自由になってくる。(第十段落)

(中略)

すでにある考え方、常識的なものを見方をどう壊していくか。いったんは「行きすぎ」の発想をしてからそれを修正する方が、発想としては面白いものが出てくる。(中略) これは〈考え方の教室〉のなかでもとても大切なことです。(第十一段落)

「普通にはこう考える」ということに対して、いつも「しかしこう考えることもできる」というのは、言ってみれば「あまのじゃく」です。しかし大切なのは「人の言うことを聞かない」のではなくて、「人の言うことと違うことを言う」ということで、つねに常識ではない他のルートもあるのではないか、山登りならもつと近道・裏道があるのじゃないかと考えているということなのです。(第十二段落)

また数学の例を出しますが、数学には「普通のやり方」と「ショートカット」と両方ある場合が多いのです。たとえばサッカーの大会が三二チームでのトーナメント形式だとして、はたして全部で何試合が行なわれるかという問題があった場合、一試合ずつ数えてももちろんよいわけですが、最後に優勝の一チームが残り、それ以外は一試合につきチームが消えていくと考えると、必要なのは三一試合、三位決定戦があるなら三二試合とすぐに答えが出ます。この考え方を思いつきさえすれば、答えを出すまでにかかる時間は、圧倒的に短くてすみますね。(第十三段落)

しかし③こうという発想をするには、逆説的ですが、常識的なことがわ

かつていないとできない。常識的にはこうする、こう考える、だからそれとは違うルートをとってこうする、と考えるは進むのです。ですからそもそも常識的な発想のない人には、なかなかむずかしいわけですね。喜劇の帝王チャップリンがじつはきわめてまじめな人だったように、逸脱したユーモアというのも常識のある人が考えるから面白い。常識ある人が何とかして「近道」「裏道」を探しだそうとする、「普通には考えないぞ」という強い意志を持つから面白いのです。まさに「二役」を切り替えていくからこそ意味があるわけです。(第十四段落)

(齋藤孝『考え方の教室』より。なお、本文には省略等がある。)

問一 傍線①「これは一人の人間のなかでも言えることです」とあるが、  
どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 気質とは少し離れたところで、大胆であることと慎重であること  
を考える癖をつけ、バランスよく使い分けて行くことでものごとが  
うまくいくということ。

イ 楽観的な気質の人、悲観的な気質の人の両方と仕事を進めている  
と想定して、それぞれをフォローする訓練をすると仕事もうま  
くということ。

ウ 楽観主義的な面と悲観主義的な面をあわせ持ち、バイアスのか  
らないニュートラルな状態で対処していくことは、非常に面白い考  
え方であるということ。

エ 自分の気質が大胆なのか、慎重なのかを見極めて自分に不足して  
いる方の傾向をもつ人物と一緒にものごとを進めるとうまくい  
くことが多いということ。

問二 傍線②「両方がないと面白くない」とあるが、筆者がこのように  
述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア ツツコミ役の人が、ボケ役の人にツツコミをまったくしないとい  
う実験をしたところ、ボケ役の人でも面白い発想がでなかつたから。

イ 世の中の多くの常識的なことは、二つの役割を切り替えることで、  
成り立っていることが多いから。

ウ 常識的なものの考え方を壊したうえで、常識とかけ離れすぎてい  
る点を修正する方が、発想が自由になるから。

エ 自由な発想をするためには、始めに常識的な考えでブレーキをか  
け、その後にツツコミをいれる方がうまくいくから。

問三 この文章における第十三段落の役割を説明したものとして最も  
適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第十二段落で述べられた「あまのじゃく」的な考え方とは反対の  
事例を提示することで、筆者の主張を際立たせている。

イ 第十二段落で提示された「あまのじゃく」的な考え方に基づいて  
検証した結果を述べることで、常識の不確かさを証明している。

ウ 第十二段落で述べられた、ものごとに対する考え方について新た  
な視点を提示し、話題の転換を図っている。

エ 第十二段落で提示された、ものごとに対する考え方を具体的な事  
例を挙げることで、わかりやすく説明している。

問四 傍線③「こういう発想をするには、逆説的ですが、常識的なこと  
がわかっていないとできない」とあるが、どういうことか。次のう  
ちから最も適切なものを選べ。

ア 常識ある人が人とは違う発想をしようとする、逆に真面目に考  
えこんでしまうため、常識にとらわれた発想しかできなくなつてし

まうということ。

イ 常識的な考え方が何であるのかわかっていないと、常識であることと常識でないことの区別がつかないため、常識的ではない発想をすることができないということ。

ウ 効率よく短時間で答えを出そうと考えるためには、人とは違った方法を試すべきであるが、常識的な方法をまずは試してみないとうまく解決できないということ。

エ 近道や裏道がないかということにこだわった発想をする人には、常識ある人とは違った発言を試してみようという意識は生まれないということ。

問五 国語の授業でこの文章を読んだ後、『二役』を切り替えて取り組む」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。

〔五〕 次のAは『伊勢物語』の原文であり、                    内の文章はその現代語訳である。Bは、Aに出てくる惟喬親王と在原業平に関する文章の一部である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

A

むかし、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は①ねむごろにもせで、酒を飲み飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。今狩する交野の渚の家、その院の桜ことにおもしろし。その木のもとに降り②みて、枝を折りて、かざしに挿して、上、中、下、みな歌詠みけり。馬の頭なりける人の詠める、

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

となむ詠みたりける。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

とて、その木のもととは立ちて帰るに、日暮れになりぬ。

むかし惟喬親王と申し上げる親王がいらつしやいました。山崎の向こう、水無瀬というところに、離宮がありました。親王は毎年の桜の花盛りには、その離宮へおいでになりました。その折には、右馬頭まがしらだった人をいつも連れていらつしやいました。——随分長い時が経ったので、その人の名は忘れてしまいました。一行は、鷹狩は熱心にはしないで、酒を飲んでまた飲んで、③和歌を詠むことにはばかり熱中してしました。今、鷹狩をしている交野まじのの「渚の院」の桜が、格別晴れやかに美しいのです。そこで、一行はその桜の木のもとに馬から下りて座り、枝を折って冠に挿して、上、中、下、あらゆる身分の者がみな歌を詠みました。右馬頭だった人が詠んだ歌は、

世の中にまったく桜というものがなかったならば、春の人の心は  
どんなにかのどかであろうなあ（でも、実際は、咲くのを待ち、  
散るのを惜しみ、雨や風に気をもみ、心が落ち着くことがない）。

と、詠んだのでした。また、別の人の歌は、

散るからこそ、いつそう桜はすばらしいのです。この憂き世に何か  
久しくとどまるものがありましようか（すべてのものは、はかなく  
滅びていく、桜も散るからこそいいのです）。

と詠んで、その木のもとを立って離宮へ帰るうちに、日暮れになりました（後略）。

（坂口由美子編 『ビギナーズ・クラシックス 伊勢物語』より）

## B

惟喬親王と恬子やすこ内親王は兄妹です。

山城の国の先にある水無瀬に惟喬親王の別宮がありました。

業平は惟喬親王に会うために、何度も水無瀬の離宮に出かけて、花を愛で、狩りをし、夜が更けるまで酒を飲んで語り合います。惟喬親王の美意識に触れると、お酒がすすんで気持ちよく酔えたのです。

業平の生涯で、もつとも心地よいひとときでした。

惟喬親王は、文徳天皇の直系の長男であるにもかかわらず、第四子である清和天皇が即位します。こうして天皇への道から外れます。その理由は、母親が紀氏から来ているという身分の違いです。藤原一族の隆盛で、じわじわと排除されていきます。

紀氏は、紀貫之、紀友則という文人を出して、文化的には大活躍しますが、その反面、政治の主流からは遠ざかっていきます。

妹の恬子内親王も同じように扱われました。惟喬親王が皇位から外されたのは、業平にとっても大きなショックであり、兄妹が主流から外されたことへの悲しみを、業平は深く共感しています。

貴種の流れを汲んでいる惟喬親王も恬子内親王も、非常に穏やかで控

えめです。「なぜ天皇になれないのか」と怒りを振りまくことはありません。二人は取り乱さず、冷静です。この性格に業平は惹かれます。それは業平も同じように主流から外された人間の気持ちがよくわかっていたからです。惟喬親王にはどんなことがあっても生涯お仕えしようと、業平は決心するのです。

毎年、水無瀬や交野の離宮で桜を愛でたり歌を詠んだり酒を飲んだり、業平は惟喬親王とよく一緒に過ごしました。季節の美が解り合え、雅を共に体験できる惟喬親王を尊敬しています。

兄の行平は、藤の花の宴で、一所懸命、藤原家の人たちに取り入り気に入られようとしています。有能な官吏としてはそうするしかありませんが、血筋としては行平も、惟喬親王に仕えたかったのではと思います。桜が見事に咲き誇るのではなく、花びらがこぼれ落ち、散るのを見て、はかないものの美しさと哀しさを共感する感覚は、権力の中核ではない、流離の貴種にしか感得できないものだったかもしれません。そこで生まれたのが業平の有名な歌です。

世の中に絶えて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

天皇から外された家系だからこそ、桜の美しさ、散る哀れがより深く感じられて、生まれた歌ではないでしょうか。

この世に桜というものがなければ、散るのを案ずることもなく、春を過ごす人の心はどんなにかのどかだったでしょう。これほどの情緒をもたらず花があるから、心穏やかに過ごせません。せめて桜が散らないものならいいのに。

(中略)

④同じように、桜が散ることに美しさを感じる惟喬親王です。水無瀬や交野に行つて、素直に涙を流せる相手がいて、この歌が詠めたと私は思いました。

こうして共感し合えれば、随行する喜び、側にいる心地良さが高まります。

この宴での、他の者の返歌です。

散ればこそいとど桜はめでたけれ

うき世になにか久しかるべき

桜は散るからこそ素晴らしい。この嫌な世に何が永遠とわにあるでしょう。ここにも、無常観と虚無の美があります。

⑤日本人の本質的な感覚が、ここに見えます。

惟喬親王と業平は環境や境遇が似ているし、心情もわかり合えることが多く、歌の世界でも親王は、業平に一目置いています。身分は違えど、

みな等しく、権力から離れた者同士なのです。

⑥権力というものは、感性に目隠しをさせ、繊細にモノを見る視力をなくさせ、大所高所からの見方だけに片寄ってしまうもの。

この大所高所からの視線からは、日本の文化は生まれなかったのではないでしょうか。

後々、藤原道長が、

「この世をばわが世とぞ思う望月の 欠けたることもなしと思へば」

この世は自分(道長)のためにあるようなもの。満月のように何も足りないものはないと詠った心境とは、対照的な視線です。

(高樹のぶ子『伊勢物語 在原業平 恋と誠』より。

なお、本文には省略等がある。)

\*1 右馬頭……令制における官司の一つ、馬を扱う。ここでは在原業平を指す。

\*2 交野……地名。鷹狩、桜の名所。

問一 傍線①「ねむごろ」・②「みて」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書け。

問二 傍線③「和歌を詠むことにはばかり熱中していました」とあるが、その理由を説明したものととして、最も適切なものは次のうちどれか。

ア 酒を飲みすぎて鷹狩に行ける状態ではなかったから。

イ 身分が低くても和歌さえ詠めれば評価されるから。

ウ 花が散るところを実際に目で見て記録に残したいから。

エ 交野に咲く桜の花の格別な美しさに心打たれたから。

問三 傍線④「同じように、桜が散ることに美しさを感じる惟喬親王で

す」とあるが、「桜が散る」ことに美しさを感じる理由を説明したものととして、適切なものは次のうちどれか。

ア 業平と同じように、政治の中心にいた藤原一族を、桜が美しく咲き誇ったあとにはかなく散る様子になぞらえ、栄枯盛衰の世に美を見出したから。

イ 業平と同じように、咲き誇っている桜ではなく、花びらがこぼれ落ちて散る桜のはかなさに主流から外された家系である自分の境遇を重ねたから。

ウ 道長と同じように、この世に桜がなければ散ることの悲しみを感じることもなくおだやかに過ごせるのに、という春ならではの切ない思いを感じたから。

エ 道長と同じように、どのような身分の人であってもみな風流なものを好み、季節が移り変わってゆくのを繊細に感じ取ることができたから。

問四 傍線⑤「日本人の本質的な感覚」について説明したものととして、

最も適切なものは、次のうちどれか。

ア 散ってなくなるものに心を奪われ、世の中をとともつらいものだと考える。

イ この世は永遠ではないという無常観に基づき、はかないものに美を見出す。

ウ 桜が咲いている時から散ることを考えると、今ではなく未来に目を向ける。

エ 桜という自然から人間の本質を見出すという、自然界と人間界の融合を感じる。

問五 傍線⑥「権力というものは、感性に目隠しをさせ」について説明

したものととして、最も適切なものは、次のうちどれか。

ア 権力を持つものは、大局的にもものを見るようになるので、繊細にものをみることができなくなる。

イ 権力が欲しいものは、権力を持つものに気にいられたので、繊細さを求めるようになる。

ウ 権力が欲しいものは、自分を大きく見せようとするあまり、繊細さをあえて手放して大胆な表現をする。

エ 権力を持つものは、多忙を極めるため、感性を磨くことを怠り、繊細さを失ってしまう。



